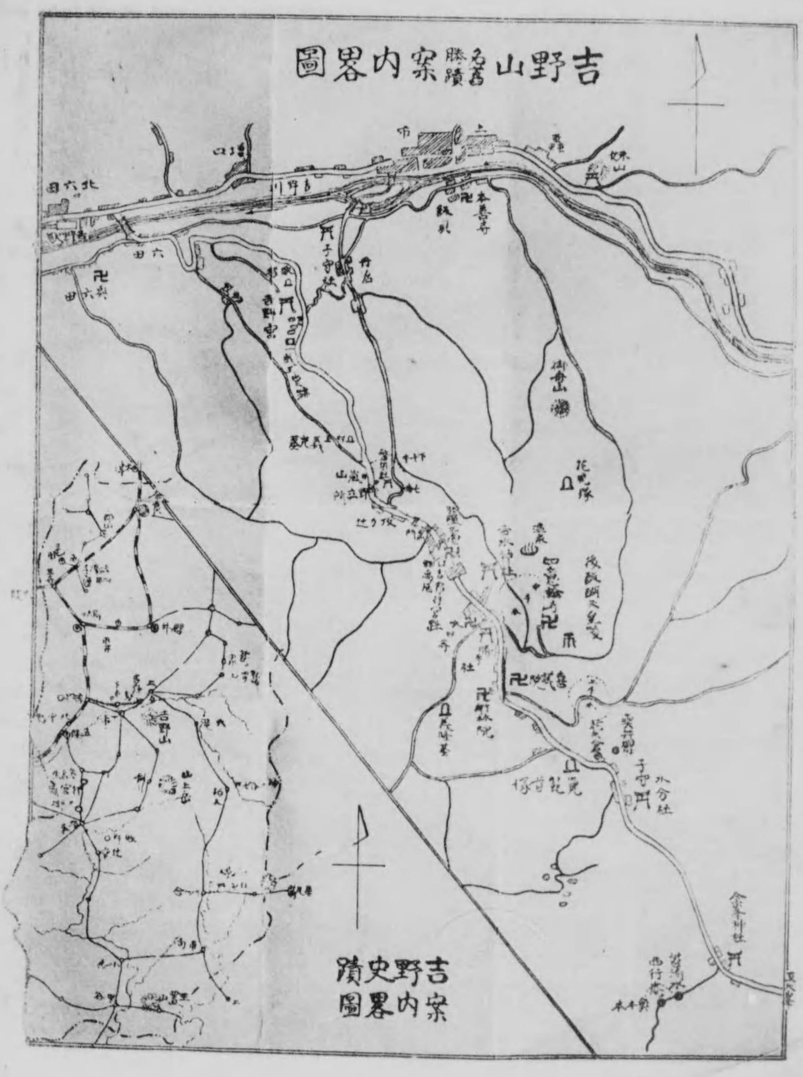
423
129

始

423
129

怡園寫山野古


吉野山名所勝蹟案内略圖
吉野史蹟
案内略圖

吉野川清流及三吉野橋

吉野鐵道終點吉野驛を下車すれば直に吉野川に接す。源を大臺ヶ原山に發し西流して紀の川となる。流程三十余里、沿岸奇景連れり。

此川は鮎の產地にして、亦有名ある吉野材木は此の川に依り搬出す、年額三百有余萬圓と稱せらる。

三吉野橋は昔「六田の渡し」と稱せし所にて、吉野山登山の第一歩なり。

吉野神宮

吉野神宮は後醍醐天皇を祭る。

本殿は木造流造檜皮葺にして桁行三間、梁行二間弱なり、拜殿神饌所、繪馬堂、寶物庫等あり。

域内櫻花多く、寶物の重なるは後醍醐天皇御製色紙、小楠公の甲冑等なり。

村上義光墓

南朝の忠臣村上義光の墓は松檜の茂れる小丘の頂に在り。

吉野山に杖を曳く者、必ず君が英魂を吊ふ。

信濃の人、彦四郎と稱し左馬權頭にして大塔宮吉野落の時、宮に代りて自刄せしは今尙人の知る所なり。

昭憲皇太后御野立所及吉野大橋

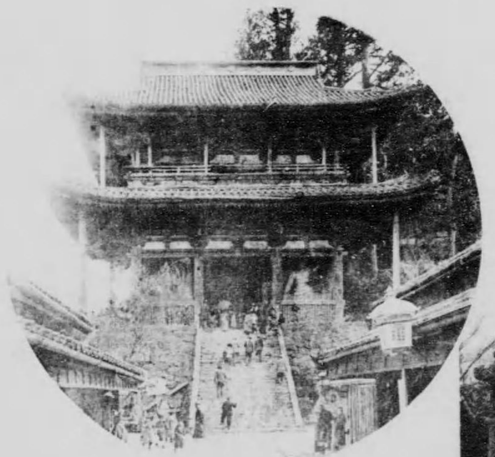
明治廿三年四月廿一日昭憲皇太后吉野山に行啓、下千本の絶景を賞せられ、主上の御覽に供せんと一枝を折らせ給ひし所なり。此所に標柱を建てゝ紀念とす。

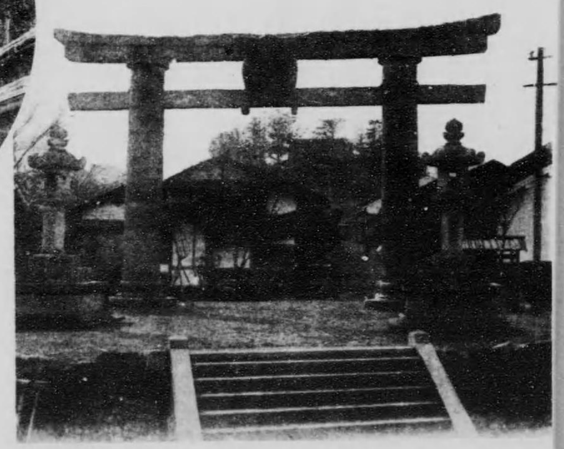
吉野大橋は、一の橋とも云ひ、吉野三橋の一なり。

下一目千本

口の千本とも云ふ。櫻花咲き亂れたる所、筆舌に盡し難く、雲か霞かと歌はれしも宜なりと云ふべし。

吉野山の櫻は山櫻多く、樹齡古し。





銅の鳥居及仁王門

銅の鳥居は高さ二丈五尺、柱周一丈一尺、額面の發心門の三字は、聖武天皇の御宸筆と傳ふ。現今の鳥居は明治廿八年四月建立せし物にして舊態を存す。

之より一丁余にして仁王門に達す、大門とも稱し藏王堂の山門なり。

藏王堂(上圖)と吉野朝宮趾

藏王堂は金峰山寺の本堂にして、山内第一の巨刹なり。天武天皇白鳳元年役君小角の創立する所。日本修道の根本道場なり。

吉野朝宮趾は仁王門より右一丁余に在り、域内に櫻樹多し。此所、吉野朝皇居の存せし所にて咲き亂れたる櫻の花は、往事を語るが如し。

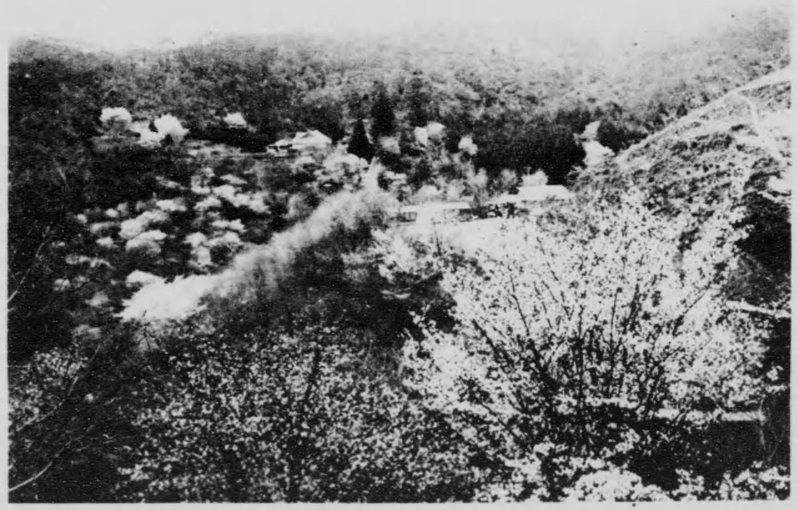
吉水神社(下圖)及山口神社(上圖)

元、吉水院と稱し、役小角の創立せる所。後、明治八年三月五日「吉水神社」と改む。

祭神は後醍醐天皇、楠正成、僧宗信にして後醍醐天皇の行宮と成し給ひし所なり。

山口神社は俗に勝手神社と云ひ、延喜式にして吉野八大神祠の一なり。

社の後山を袖振山と云ふ。

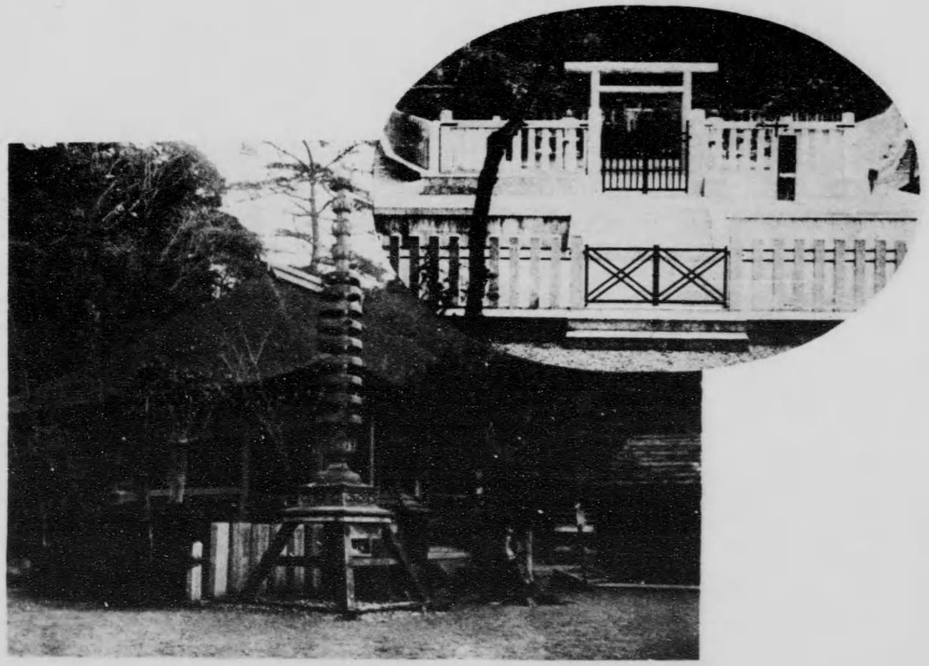


中一目千本

櫻花爛熳たる所誠に天下の偉觀あり。

遙かに見ゆるは如意輪堂にして、塔尾山其後にそびゆ。

此邊道羊腸として上り在り、下り在り、散策にいと面白し。



後醍醐天皇御陵と如意輪堂

後醍醐天皇塔尾御陵は、如意輪寺境内に在り。謹んで拜すれば、萬感交々至り、感慨の涙、ふぼし滂沱たるべし。

如意輪堂は、吉野朝の勅願所にして如意輪觀音を安置す。有名なる楠正行の辭世歌は寶物として今尙殘れり。

上一目千本

下、中、各千本と共に櫻樹多く、萬朶の芳雲言語に絶す。此所より吉野全山の大觀は偉大を極む

開花下、中より拾數日遲る。

吉野山全景

吉野山上千本高所より眺むる時、其脚下に吉野山全景は恰も盆景の如く展開し來り、壯觀極りなし。

櫻花白雲とまがへて其中に杉檜の散見せる樣畫中の畫なり。

水分神社（上圖）と奥千本西行庵（下圖）

水分神社は吉野八大神祠の一にして、延喜式俗に子守明神と云ひ、社殿、構造は桃山時代の特長を發揮す。

奥千本は行人杖を曳く者稀なれども、人跡絶へたる別天地にして櫻多し、此所に西行法師の三年間幽棲せし西行庵在り。

金峰神社(下圖)と蹴拔の塔(上圖)

金峯神社は吉野八大神祠の一にして、金山毘古神を祭る。

社務所の右釘拔門より一丁余下れば蹴拔の塔あり。隱れ塔とも云ひ、文治年間源義經敵に追はれて此所に隱れしを以て名あり。

大正十二年四月二日印刷發行

著作兼發行者　大和國吉野山　大東富太郎

印刷者　大阪市北區西梅枝町八五四地　山下義三郎

印刷所　大阪市北區西梅枝町八五四地　山下麗正舘

發行所　大和國吉野山　吉野山土產物商組合

終